city & life

都市のしくみとくらし

別冊

Let's Greening

緑で生まれ変わるまちとくらし

第28回（2017年度）緑の環境プラン大賞受賞作品集

city&life 別冊

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

緑の国民的イベントへ

審査委員会委員長 進士五十八

平安貴族たちは、「庭いじり・仏いじり」にはまっていたようだ。庭は身の回りを美しい環境で包むことであったし、仏は精神的安定、心の拠りどころであったのだろう。

イギリス女性たちのコテージガーデンも、播種から配植、撫育管理まで草花をいつくしみながらのくらし方そのものであった。いまでは王立園芸協会がリードするチェルシーフラワーショウは庭趣味を超えた世界的な一大イベントになっている。

私自身が企画段階から関わって審査委員長も全20回つきあってきた「国際バラとガーデニングショウ」（主催：毎日新聞社ほか、会場：西武ドーム）などわずかな会期にもかかわらず約20万人ちかい入場者を数えている。作品を出展するのは無料だが、区画のなかに立派な作品を創るのだからおそらく何十何百万円の費用を持ち出しての参加だし、一方、来場者も数千円の入場料を払って来てくれる。

出展者も多彩で、プロやセミプロ、時々はガーデニング趣味のシニア夫妻とか、農業高校の生徒さんも少なくない。

審査員として初回から20回までの変遷をみると、最初は主催者に迎合してバラを多用したり、優劣に差があったが、回を重ねるごとにコンセプト、テーマ、植栽、工作物のデザインから施工まで、表現法から仕上げまで驚くほど高度に成長した。ドーム内という限られた空間と工期では気の毒でもったいないと審査員一同実感したし、日本のガーデンデザインの高度化に大きく寄与したといえる。

私の考えでは、「緑の環境プラン大賞」は、実にこのイベントを日本各地のさまざまな地域課題をかかえた場所や場面に、しかも多様な主体の知恵と行動力によって、まさに全国展開させている国民的イベントといえるのではないかということである。その凄さを、本誌の作品群でじっくり味合って、貴方も来年是非共参加してほしいと願う。

しんじ・いそや―― 福井県立大学長／東京農業大学名誉教授・元学長／農学博士

表紙・裏表紙
「花と緑の力で!つながりの庭」プロジェクト
（関連記事:p4）
photo:坂本政十賜

contents

シンボル・ガーデン部門

国土交通大臣賞	社会福祉法人みらい	みらいおもいけ園グリーンガーデンプラン	兵庫県神戸市	2
緑化大賞	一般社団法人雄勝花物語	「花と緑の力で!つながりの庭」プロジェクト	宮城県石巻市	4
	豊田矢崎橋やすらぎ処プロジェクト	矢崎橋やすらぎ処	東京都日野市	6

ポケット・ガーデン部門

国土交通大臣賞	学園町ちゃい旅・ガーデンプロジェクト	大泉学園町7丁目「もみじの庭」みどりと笑顔をおすそ分けするポケットガーデン	東京都練馬区	8
コミュニティ大賞	株式会社ポピンズ	保育園発、地域の「つながる庭（ビオガーデン）」	東京都江戸川区	9
	株式会社小学館集英社プロダクション	風そよぐ大地と小さな探検隊・小学館アカデミーむさししんじょう第2保育園	神奈川県川崎市	10
	特定非営利活動法人子育て研究会	陽なた村・香りと食のエディブルガーデン	滋賀県守山市	11
	社会福祉法人どんぐり福祉会	ひろがれ!都会の小さなビオトープ	大阪府東大阪市	12
	豊中みどりの交流会	みんなで育てよう・ふれあいの庭に	大阪府豊中市	13
	大阪府立園芸高校ハニービーサイエンスクラブ	ミツバチを見ながらアフタヌーンティーを!～生きものに優しいポケット・ガーデン～	大阪府池田市	14
	フラワーマイスターみき	植える花夢（ウエルカム）ガーデン～鳥・蝶・人～	兵庫県三木市	15
	社会福祉法人新樹会すくすく・いきいき村	緑陰で深まるコミュニティスポットの可能性	大分県大分市	16
	赤坂みつばちあ及びTBSテレビ	赤坂BeeTownプロジェクト	東京都港区	17

特別企画「おもてなしの庭」

大賞	公益財団法人東京都公園協会	日比谷公園おもてなしのバラ園	東京都千代田区	18

国土交通大臣賞

社会福祉法人みらい
みらいおもいけ園グリーンガーデンプラン
兵庫県神戸市

●運動場だった園庭には針葉樹のチップなどを撒き土壌を改良。小屋の奥の傾斜地が果樹園となっている。

地域との交流の場を目指す、やさい・くだもの畑

2017年、神戸市立の知的障害者施設の民間移管を受け、生活介護事業所と就労継続支援B型の多機能型障害者サービス事業所としてリニューアルオープンした「みらいおもいけ園」。運営する社会福祉法人みらいでは、移管を受けて施設も新築。現在、交流スペースとして利用している日当たりの良い部屋を、今後、カフェにすることを構想している。目指すのは、利用者が世話をし、栽培した野菜や果物を使ったランチやフレッシュジュースの提供。そのための第一歩となるのが、今回の助成を受けて実現した園庭の改良、「みらいおもいけ園グリーンガーデンプラン」だ。

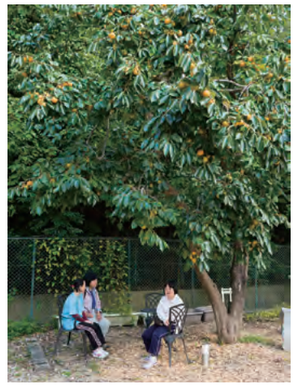
運動場として使われていた園庭の固い地盤に、針葉樹のチップや伐採した枝、落ち葉を敷き詰めて土壌を改良。その一角では土を入れ替え、盛り土をして野菜の栽培を始めた。廃材置き場のようになっていた場所には木造の小屋を建て、農機具の収納や、農作業の休憩スペースに。傾斜地には石垣をつくって段々畑とし、ブルーベリーやミカン、ナシやイチジク、オリーブなど、さまざまな果樹を植えた。まずはたくさんの果樹を栽培してみて、手入れがしやすく、環境にあった種類を、今後は増やしていく予定だ。

カフェオープンの目標は概ね3年後。それまでに里山のような、人と自然が調和した循環型の環境を構築し、利用者と、地域の方々とが垣根なく交流できる、温かな場所をつくりたいと考えている。

●枯れ枝や落ち葉なども土に還し、循環型の環境づくりを行っている

●園庭の花壇や、果樹園での水やりの様子。なかには、植物に触ることさえ苦手だった人もいたが、今ではみんな、木々の手入れを楽しんでいるそうだ

●2017年にリニューアルオープンした「みらいおもいけ園」。
大きなクスノキの向こうに見えるのが、カフェになる予定の交流スペース



●作業の後には、カキノキの下のベンチや小屋で休憩。屋外で過ごす心地よさを満喫

●盛り土をした菜園。ナスやブロッコリー、ニラ、空芯菜なども育てられている。イチゴはすぐに実をつけて、みんなで収穫したという

一般社団法人雄勝花物語
「花と緑の力で!つながりの庭」プロジェクト

宮城県石巻市

●園路の両サイドにはツルバラが絡まるパーゴラや木製タワーが設置され、草花を立体的に楽しむことができる

●近隣の高齢者福祉施設からお散歩に訪れたグループ。保育園の子どもたちが遊びにくることも

復興への礎となる、雄勝ローズファクトリーガーデン

東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県石巻市雄勝町。徳水利枝さんのお母様が暮らしていた実家も、近隣の親戚の家も、その住まい手と共に津波に飲み込まれてしまった。徳水さんは震災後まもなくその土地に、慰霊の思いを込めて花を植えた。その花畑には次第に、一緒に花を植えたい、手入れをしたいという人々が地域内外から集うようになった。震災から7年間で、およそ8000人のボランティアや支援者が訪れ、共につくりあげてきたのが「雄勝ローズファクトリーガーデン」だ。

一方、長らく検討が続いていた石巻市雄勝町中心部の復興計画として「雄勝ガーデンパーク構想」が2017年5月に策定。同ガーデンはその中心的存在に位置付けられた。これに伴い市有地の20年以上無償借用を前提に、場所を移設することになった。今回の助成は、この官民連携の復興事業の一助として活用され、2018年3月、約1230㎡の土地に「新雄勝ローズファクトリーガーデン」が誕生した。テーマは「花と緑のあふれる美しい空間で来訪者をあたたかく迎え、誰もが心地よくゆったりと過ごせる癒しの空間」だ。

基盤整備が完了した今もなお、花々の手入れ、植え替えなどは、訪れるボランティアの人々の手によって継続中だ。およそ130種300株のバラのほかにも、デイジー、ポピー、ネモフィラなどの草花が色どり鮮やかに咲き誇る。そんな様子からは、この場所が、いかに多くの人々に愛され、大切にされているかが、言葉以上に伝わってくる。

●徳水利枝さん（右）と、「花と緑の力で3.11プロジェクトみやぎ委員会」委員長の鎌田秀夫さん。鎌田さんは庭づくりの専門家として、初期からずっと支援を続けている

●雄勝町では「北限のオリーブ」の栽培にも力を注いでいる。花壇の中央にあるのは、今回移植された樹齢100年に及ぶというオリーブの木

●ガーデン内に涼しげな雰囲気をつくる月の池と石のベンチ

●ガーデン入り口の石垣は、歴史ある穴太（あのうしゅう）衆積みの高名な石工職人に習い、ボランティアと共に積んだもの

●以前のガーデンから移設した「ミニ東京駅」。東北の伝承にある、幸せになれる家「迷い家（まよいが）」とも称している

●ハナミズキやアオハダなどの足元を、デイジーやポピーが鮮やかに彩る

豊田矢崎橋やすらぎ処プロジェクト
矢崎橋やすらぎ処

東京都日野市

●矢崎橋の東側に設けられた見晴らしデッキ。
野鳥観察にも適した休憩スポットだ

●カワセミカップルが子育てしやすいように工夫を凝らしたカワセミアパート

●かつてこの辺りにホタルが飛んできたという。
ホタルの復活を願ってつくられたホタル池

●矢崎橋の西側にある大ケヤキ。やすらぎ処プロジェクトのシンボルツリーだ

●水田のある風景を蘇らせた豊田んぼ。
地域の子どもたちが稲刈を体験

豊田の緑と水の暮らしを次世代に伝える

都心から1時間あまり、「江戸の台所」と呼ばれた豊田は、豊かな湧水に恵まれ、用水があり、田んぼが広がっていた。そんな里山の風景も周辺にはマンションが立ち並び、宅地開発が進み、大きく様変わりした。

矢崎橋は、JR豊田駅から程近い、湧水と用水が崖線で交わる複雑な地形に位置する。長期にわたる区画整理事業の最後に予定されている公園予定地内にあって、以前から住民の間で、有効活用の道が模索されていたが、「生きものと自然の暮らしが息づく里山を再現したい」と、「矢崎橋やすらぎ処プロジェクト」はスタートした。

矢崎橋西側の大ケヤキと雑木林は残して、橋の東側に見晴らしデッキを設置した。また、今や日野市のシンボルともいえるカワセミが営巣できるカワセミアパートとカワセミの餌になる小魚を飼育する小魚池を、さらに十数年前まで生息していたホタルの復活を願いホタル池を新設した。

豊田の象徴といえば水田だが、その風景を蘇らせようと、用水を利用して小さいながらも「豊田んぼ」もつくった。新設道路にぶつかった田んぼの土を地域のつながりで移設した。設計・施工は豊田で稲作を経験した人のアドバイスで行われたが、維持管理は、住民たちが行っている。「豊田んぼ」では、さっそく稲刈り体験のイベントが行われた。かつての農の風景を再現し、「緑と水の暮らし」を次世代に継承してくこと。「矢崎橋やすらぎ処」はその拠点になることを目指している。

●緑と水の暮らしを象徴する豊田用水。
小魚池から水が流れ落ちる

●刈った稲は束ねて逆さにしてハゼにかける。一仕事終えてみんなで記念撮影

ポケット・ガーデン部門

国土交通大臣賞

学園町ちゃい旅・ガーデンプロジェクト
大泉学園町7丁目「もみじの庭」みどりと笑顔をおすそ分けするポケットガーデン

東京都練馬区

●オカトラノオ

●ウラシマソウ

●ウツギ

●クマザサが生い茂っていた場所の草刈りを行い、コンクリート洗い出し仕上げのアプローチを設けた。東屋のようなベンチはひと時を過ごすのに格好の場所

●垣根を切って、開かれた雰囲気のエントランスをつくった。垣根には、新芽が赤く色づくレッドロビンを新たに植樹

●モミジの大木が、涼やかな木陰をつくる

風わたり、鳥がさえずるもみじの木陰

1924年、1区画300坪、建ぺい率20%の緑豊かな住宅街として開発された練馬区大泉学園町。この町で、今回、自邸の庭の一部をポケットガーデンとして地域に開放する整備を行ったのが尾形久美子さんだ。大泉学園町7、8丁目では2015年より、丹精された庭を地域に開放するオープンガーデンイベント「ちゃい旅」（「茶・庭・菓をめぐるちっちゃい旅」の略称）が開催されており、尾形さんもこれに参加してきた。尾形さんは、オープンガーデン時に訪れる人々との交流を通じ、良好な住環境を維持すること、またコミュニティの大切さを実感。ちゃい旅を主催する公益財団法人練馬区環境まちづくり公社や環境共生住宅の設計を専門とする設計事務所・チームネットら有志と共にプロジェクトを発足し、地域の人々が集い、自然の中で憩う場所として「もみじの庭」を整備することにした。

母屋の入り口とは別に、垣根の一部を開いて門扉をつけ、クマザサが生い茂っていた場所にはコンクリート洗い出しのアプローチを設置。その傍らには、訪れる人々が座ってくつろげる東屋も配置した。樹齢を重ねた紅葉の木立が爽やかな木陰をつくり、鳥のさえずり、風の音を感じる、心地よい場所が誕生した。

門の開け閉めは、朝晩、尾形さんが行い、門が開いている時には、地域の人に自由に入ってきてもらう。「この庭で、緑豊かな町並みへの愛着を育んでもらえたら」と尾形さんは笑顔で語る。

ポケット・ガーデン部門

コミュニティ大賞

株式会社ポピンズ
保育園発、地域の「つながる庭（ビオガーデン）」

東京都江戸川区

●自然共生をテーマにつくられたビオトープ。つながる庭のシンボルだ

●地域の交流拠点になればと道路に面した場所に設置された

●近くにデイサービスがあり、そこを利用する高齢者や職員が気兼ねなく立ち寄れるスポットになっている

●見て楽しむだけでなく、食べて楽しくなるように、果樹なども植えられている

●ビオトープで元気よく泳ぐ金魚は、園児が金魚祭りでもらってきたもの

自然、地域とつながり、未来へもつながる場所

ビオトープのある保育園ということで、「つながる庭（ビオガーデン）を前面に打ち出しています」というのはポピンズナーサリースクール中葛西施設長の村上雅代さんだ。「弊社は210カ所以上の既存園を運営していますが、専用庭をもつところは珍しく、そのメリットを最大限発揮できるように、いろいろな試みをしています」とのこと。

保育園は、ひときわ防犯上の配慮が必要な施設だが、一方で地域の交流拠点としての位置付けをもっているため、ビオガーデンは入口前の道路に面した場所に設置し、誰でも立ち寄ることができるようにしたという。ちょうどそばにデイサービスがあり、高齢者の方や職員が、ちょくちょく立ち寄っては、花々を鑑賞したり、会話を楽しんでいる光景をよく目にするそうだ。

四季折々の花々が楽しめるようにとハナミズキやアジサイなど季節を意識した15種以上の樹種が植えられている。草むしりや落ち葉拾いは保育園スタッフが担当。園児や保護者、また近隣の住民も参加して、地域の自然をみんなで守ろうという意識は確実に高まっているという。

取材当日、ビオトープに2匹の金魚を発見。7月末に近くの公園で開催された金魚祭に参加した園児がもらってきたものだという。植物だけではなく、生きものがたくさん集まってくる庭は、まさに自然とつながることができる本格的なビオガーデンだ。

株式会社小学館集英社プロダクション
風そよぐ大地と小さな探検隊・小学館アカデミーむさししんじょう第2保育園

神奈川県川崎市

●ただ今自然観察中。食育も考慮して、実のなる木も植えられている

右●すっかりきれいになった竪穴式住居。園児だけでなく、保護者にも好評だ
下●ビオトープには、虫たちがたくさんやってきて、園児たちは楽しそう

●日々の水やりも、園児たちの大事な仕事。草花が育っていく姿を見るのは大人も嬉しい

地域の歴史と自然が感じ取れる里山をめざす

開園して5年。開園に合わせてつくられた竪穴式住居の経年劣化が目立つようになり、コミュニティ大賞の助成金を使い補修・改修に踏み切った。同時に、土壌改良と植栽を改め、ビオトープと畑を整備し、地域とのかかわりをより深めるために、初めてビオトープ開放に取り組んだ。

「この近辺には、複数の貝塚があって、その記憶を蘇らせようと竪穴式住居をつくったんです。ところが5年も経つと痛むんですね。一時は撤去という話も出たんですが、竪穴式住居はここのシンボルであり、きれいにすれば園児たちももっと遊んでくれるだろうと。当初はいい赤土だった地面もつるつるになってしまった。それなら、一緒に土壌改良もやって、発育不良の高木類の植え替えと草花も増やそうということになりました」と園長の阪本由紀さんは当時を振り返る。

ビオトープを開放したのは、2018年の3月。年長児たちが卒園前に遊べるようにという配慮からだった。公開するにあたって心配する保護者もいたようだが、今では、スタッフと保護者との交流の機会も増えて、概ね好評のようだ。「草むしりを一緒にしてくれたり、すごく協力的で助かってます」と阪本さん。

ビオトープは通りに面しているため、近隣の人たちも絶えず気にかけてくれるようで、今後は、みんなが遊べるビオトープとして地域との協力関係をより強くしていきたいという。

特定非営利活動法人子育て研究会
陽(ひ)なた村・香りと食のエディブルガーデン

滋賀県守山市

●「陽なた村」の入り口に整備された「エディブルガーデン（食べられる花壇）」。右手、既存の看板の構造を利用して、新たにベンチも設置した

●立体的に、中心が少し高くなっている渦巻き状の花壇。香りの強いハーブ類を混植することで、害虫よけの効果もある

●小さな、赤く実ったイチゴを摘み取る。中央は子育て研究会理事長の北山早智子さん

●子どもたちと保護者、スタッフも集い、花壇の周りでの談笑

食と命のつながりを学ぶ、食べられる花壇

障がいの有無にかかわらず、子どもたちに多様な体験の場を提供することを活動の一つとしているNPO法人子育て研究会。その活動拠点である「陽なた村」は、絵画や音楽に携わる人々のアトリエが集まった、いわゆる芸術村だ。その入り口にあって、ほとんど放置状態だった花壇の再整備が、今回の助成により実現した。

ビワやツバキ、ムクゲなどの中低木は残しつつ、新たにサクランボやブルーベリーなど、実のなる木を植えた。草花と雑草が入り混じっていた広場部分は一新し、砂利で園路をつくり、中央には渦巻き状に石段を組んだ花壇を設置。植えられたのは、ミントやタイムなどのハーブにイチゴ、リーフレタスなどの食べられる植物だ。中心の少し高い場所には乾燥に強い植物を、下に行くにつれ、水をたくさん必要とする植物を植えるなど、植栽種に変化をつけ、バランスよく混植されている。混植には害虫よけの効果もあるそうだ。

障がいのある子どもたちの中には、植物に触ることさえ躊躇する子もいる。だが、この「食べられる花壇」のハーブや野菜を使って、クッキング体験をしたり、摘み取ったミントのハーブティを飲んだりする中で、植物に関心を持ち、積極的に自然と触れ合う姿が見られるようになったという。

沿道からもよく見える花壇には地域の人々が立ち寄り、子どもたちに声をかけてくれることもある。地域の交流拠点としての役割も、少しずつ定着しつつある。

社会福祉法人どんぐり福祉会
ひろがれ! 都会の小さなビオトープ

大阪府東大阪市

●園庭の一角につくられた小さなビオトープ

●子どもたちは、首から下げたルーペで水中を熱心に観察。水中を覗き込めば、たくさんのメダカが水草の陰で遊んでいるのがよく見える

●ビオトープは道路に面しているため、子どもたちと地域の人との日常的な交流の場にもなっている。自治会の会合や敬老の催しなどでセリ摘みを行うこともあるとか

子どもたちの好奇心を刺激する、豊かな水辺

人情味あふれる大阪の下町・東大阪市。その住宅街の一角に、どんぐり保育園はある。1973年に保護者らが立ち上げた無認可保育所を前身とし、2001年より認可保育所に。2004年に園舎を新設した際、園庭の一角に小さなビオトープをつくった。雨水循環と水生植物の浄化作用により、澄んだ水を湛えるビオトープは、町のオアシスのような存在となっていった。

ただ、ビオトープを覆う藤棚の老朽化をきっかけに再整備を計画。園庭開放時に毎週訪れている未就園児を始め、より多くの地域の方々に水辺環境に親しんでもらえるよう、ウッドデッキ設置も検討され始めた。また生態系の一翼を担う場所として、外来種や園芸種を排し、在来種を中心とした植栽にリニューアルする方針もたてられた。そして今回の助成を受け、いっそう豊かな水と緑の環境整備が実現した。

寒冷紗が掛けられた藤棚が、程よく日差しを遮る水辺には、セリやイグサ、ハンゲショウなどが茂り、澄んだ水の中には、たくさんのメダカが泳いでいる。水面に小さな水紋をつくるのはアメンボだ。季節が変わればトンボもやってきて、水中ではヤゴも育つようになるだろう。集まってきた園児たちは、首から下げたルーペで、水中や、植物の葉の表面を熱心に観察し始めた。「メダカが3匹!あっちにもいる!」と大きな声で教えてくれる。小さなビオトープには、いつ見ても、何回見ても、新しい発見が必ずあるのだ。

豊中みどりの交流会
みんなで育てよう・ふれあいの庭に

大阪府豊中市

●休憩用のパーゴラ（モッコウバラの白花、黄花が植えられている）とベンチ

●空間にアクセントを与えるトレリス。さて、どんな植物が巻き付くのか、今から楽しみだ

●シンボル花壇には、さまざまな花が咲き誇る。奥の棚には、植え替えを待つ花苗が並んでいる

●受賞記念の花壇を設置し花苗植え付け体験などのイベントに活用している

●車イス利用者用の高さ調節可能な手づくりテーブル。植木の作業に大活躍

「ふれあいの庭」を誰もがくつろげる市民の場所に

自由参加で、花壇づくりや緑化活動を行なっている豊中みどりの交流会は、育てた花苗を小学校や地域の公園、施設などに提供する「花苗プロジェクト」やゴーヤなどを利用して「みどりのカーテン」づくりを支援し、小学校や公共施設に提供する「みどりのカーテンプロジェクト」、また、みどりについて広く学ぶ「地域みどり学習プロジェクト」などを中心に活動を展開してきた。今回コミュニティ大賞の助成金で、その活動拠点である「ふれあい広場SEED」（愛称）を整備し、管理者や公園来場者が気軽にくつろげる場所にしたのだ。

休憩施設の整備として日陰用のパーゴラやベンチの改修、給水施設の整備として水飲み及び洗い場兼用のシンクを新設、さらに、修景施設の整備としてつる性植物を這わせるトレリスとパーゴラを新設し、シンボル花壇の改修も行った。

ふれあい広場SEEDは、約13haの広大な敷地を有するふれあい緑地内にあり、周囲には温水プールやテニスコート、サッカー場、野球場などのスポーツ施設やバラ園などの公園施設が整っている。また、SEEDの前面側道を隔てた広場には、民間保育園が設置されている。今後、施設利用者の増加が見込まれ、それに伴いふれあい広場SEEDへの関心も高まることが予想される。豊中みどりの交流会の活動がより活発化するきっかけとなることを期待したい。

大阪府立園芸高校ハニービーサイエンスクラブ
ミツバチを見ながらアフタヌーンティーを!
～生きものに優しいポケット・ガーデン～

大阪府池田市

●広い敷地に小さな庭をたくさんつくる。地域に緑を増やすためのモデルガーデンになればと願う

●1年草と宿根草・低木の混ぜ植えで花壇にリズムを。これも庭づくりのコツ

●ラズベリーには蝶もハチもやってくる。今後は食べられるものをもっと増やしていきたい

●ハチミツ絞り体験やミツバチ箱の観察会などを地元の保育園と協力して実施

●生徒たちのつくったハチミツは、学校内で販売されている

広くなくても楽しめる小さな庭づくりのすすめ

校内の敷地に、花壇として有効利用できていない場所がある。そこで、主にミツバチが利用する植物を植え、生きものが観察できて、花々も楽しめる小さな庭として、近隣住民にも公開していく。

「バタフライガーデンが流行っていますが、チョウだけでなく、いろいろな虫が訪花する〈ハニービーガーデン〉と名付けた新しいタイプの庭を提案しています。ナチュラルガーデンの手法で管理していますが、いわゆるナチュラルガーデンと違って、色とりどりの花が楽しめる庭です」と教えてくれたのは府立園芸高校フラワーファクトリ科教諭・尾崎幸仁さんだ。日本人の多くは花がないと庭ではないと思いがちだが、ナチュラルガーデンは葉（グリーン）を楽しむもの。その考えを尊重しつつ花々をどれだけ取り入れていくか考えるのが楽しいと尾崎さんは言う。

園芸デザイン部「ハニービーサイエンスクラブ」は、地域の保育園に出向きハチミツ絞り体験学習を実施してきたが、その最中に園児から、「ミツバチはどんな花につくの?」と質問されたのがきっかけで、ミツバチだけでなく、虫が好む花の研究を始めた。

「小さい敷地でもいい庭はできます。うちの花壇がモデルガーデンになればいいなと思っています」と尾崎さん。多くの家庭や企業が庭づくりに精を出す。そんな小さな庭がいたるところに生まれて、生きものもいっぱいやってくる。庭づくりから始めるまちづくりだ。

フラワーマイスターみき
植える花夢（ウエルカム）ガーデン ～鳥・蝶・人～

兵庫県三木市

●市外からも多くの人々が訪れる、三木山総合公園の入り口に設けられた「植える花夢（ウエルカム）ガーデン」

●ピンコロ石で縁取られた花壇の間を散策できる小道

●花壇の設計から、管理・運営を主体的に担う「フラワーマイスターみき」のメンバー。種から育てた草花を、愛情をもって手入れしている

●花々の間には、モンシロチョウの姿も

花の「おもてなし」エントランス

兵庫県三木市では2011年より、隣接する小野市と合同で「ガーデニング学習講座」を開催。2年にわたる全課程を修了した市民には「北播磨フラワーマイスター」の認定証が授与されている。「フラワーマイスターみき（以下、FMM）」は、その1期生が立ち上げたボランティア組織で、メンバーは約50名。三木市役所の一角にある温室で種から草花を育て、市内各地の花壇への植栽や水やりなどの手入れ、定期的な植え替えを行っている。「日本一美しいまち」を目指す三木市にとって、頼もしい市民サポーターだ。

2017年10月、市民のスポーツ・レクリエーションの施設が集まった三木山総合公園がリニューアルされたことにあわせ、施設へのエンランス部分に緑豊かな景観形成を図ることが計画された。その花壇づくりに対して今回の助成を活用。後背地の豊かな自然と連携できる、蝶や鳥がたくさん訪れる植栽計画や、訪れた人々が、草花の間を散策できる小道を設けた花壇設計がFMMメンバーによって行われた。

緩やかな斜面地に三角形を描く花壇には、ジニアやケイトウ、ナデシコが咲き誇り、オリーブやブルーベリーなどの中低木が立体感を与えている。FMMメンバーは毎朝水やりに訪れ、花殻を摘み、花壇の維持管理に余念がない。小さいながらも、色とりどりの花が出迎えてくれるこの花壇は、総合公園に訪れる人々に、三木市の美しさを印象付けるに違いない。

社会福祉法人新樹会 すくすく・いきいき村
緑陰で深まるコミュニティスポットの可能性

大分県大分市

●ざわざわ山は、生きものたちを観察する場所と水遊びの場所がある。山の中央にはひらめき砦

●春には山桜が秋には紅葉が、四季折々の植生を楽しむことができる

●園児たちには登ったり降りたりの運動コース。高齢者には、木々を楽しみながらのお散歩コース。幅広い世代が思い思いに楽しむ本物の里山

●ざわざわ山は、こども園の園庭であり、デイサービスの庭であり、地域に暮らす親子には、子育て支援の場所でもある

地山をいかした“ほんもの”の里山をつくる

「すくすく・いきいき村（緑が丘こども園）」は、高度経済成長期に造成された団地内にある。団地内に田畑などの自然環境を満喫する場所は乏しく、1万4000㎡の敷地面積を有する「すくすく・いきいき村」にあるざわざわ山が、唯一貴重な自然体験の場所になっている。

ただ、ざわざわ山は、もともとの地山の緑陰が少なく、高齢者の利用には不適な場所になっていた。また、ビオトープである「じゃぶじゃぶ池」内も直射日光を受けて、生態系への影響が懸念されていた。

そこで、コミュニティ大賞の助成金でざわざわ山の整備を行った。ヤマザクラとヤマモミジを植林することで緑陰効果を充実させ、ビオトープの生態系を回復するための環境整備を行った。

ざわざわ山は、こども園の園庭であり、デイサービスの庭でもある。園児たちにとっては、おもいっきり走り回れる野外の遊び場であり、高齢者にとっては、自然と触れることができる散策の場である。一方、「すくすく・いきいき村」にはカフェが併設されていて、カフェ利用者にとっては格好のお散歩コースになっている。また、地域の子育て支援の場でもあることから、地域住民の憩いの場所としても機能している。

少子・高齢化が進み、周辺では、独居や核家族も多い。地域の幅広い世代が利用できる場として、また何よりも自然を満喫できる場所となることが期待されている。

※第27回（2016年）にて受賞

赤坂みつばちあ及びTBSテレビ
赤坂BeeTownプロジェクト

東京都港区

●ミツバチは白から黄色を強く認識するようで、黄色系の花にたくさん集まってくる

●2011年4月から6群、約10万匹を通年飼育している。都市養蜂の蜜源は、サクラ、マロニエ、ユリノキ、シイノキ。赤坂周辺にこれらの木々は多い

●プランターにはハーブ類も多く、水やりを手伝ってくれているボランティアのお土産に。なかでもバジルの人気は高く、ここのバジルを使ったカプレーゼは絶品とか

●鹿児島から来たミツバチの巣箱は、現在6群に増えた。ちなみに、「みつばちあ」とは「みつばち」+「cheer（元気にする）」の意味

四季折々の変化を楽しみ、収穫の喜びをかみしめる

「楽しめる屋上緑化とミツバチによる生物多様性」をテーマに、2011年4月から放送局の8階屋上で、ミツバチ飼育が始まった。最初ミツバチの巣箱は四つ。今は、六つに増えて、ミツバチも約10万匹になった。

ミツバチは、ビルの屋上から街路樹などの樹の花に蜜や花粉を集めに行くが、赤坂周辺は、サクラ、マロニエ、ユリノキ、シイノキなど蜜源に恵まれている。

屋上のミツバチと緑化スペースで、地元の小中学校を対象に環境授業を行っているが、2015年度から港区教育委員会の推薦授業になった。ミツバチの採蜜範囲は半径3kmと知ると、自分の家や学校に「ミツバチの好きな花を植えたい」という小学生が現われた。環境学習の成果は確実に出ている。また、地元町会や事業者を対象に年15回程度、見学会を実施している。

屋上緑化の計画が出た時、全面緑化は耐荷重から無理と判断、プランターの使用に変更。しかし、それが功を奏して、さまざまな植物を植え替える楽しみが増えた。ミツバチの好きなイチゴの花や採蜜の様子が観察できるミント・ローズマリー・タイム・セージなどのハーブ類、夏場には、夏野菜も育てている。

環境指標動物のミツバチが飛び回る場所は花と緑が豊かな証拠。人間にとっても好ましい環境だ。1年目にはチョウやアシナガバチ、2年目はトンボやテントウムシ、3年目には珍しいオオスカシバもやってきた。都市の真ん中で、生物多様性は確実に進んでいる。

※第27回（2016年）にて受賞

公益財団法人東京都公園協会
日比谷公園おもてなしのバラ園
東京都千代田区

●今回の整備で花壇スペースは従来の1.5倍に。バラの株が大きく育つように配慮した

●「ゴールドゾーン」に植栽されたバラ。赤い大輪は比較的伝統的なタイプの「ローズオオサカ」、柔らかい雰囲気のバラは新しいタイプで、「トロピカルシャーベット」もその一つ

百余年の歴史を次代につなぐバラ園

都立日比谷公園内で、日本で初めて幾何学的な構成をもつ洋風庭園として整備された「日比谷公園第一花壇」。永らくバラ園として親しまれてきたが、公益財団法人東京都公園協会が、五輪に向けて増加する国内外のお客様をおもてなしするために、充実したバラ園となるよう再整備することとした。

再整備のテーマは「Japanese Delegate（日本代表）」。日本の園芸技術を世界に発信することをコンセプトに、新たに植栽されるバラや草花は、すべて日本の育種家によって作出された園芸品種とした。また、第一花壇全体を「ゴールドゾーン（国際コンクールで金賞などを受賞したバラのゾーン）」「香りのゾーン（香りの強いバラのゾーン）」「ブルーゾーン（青みがかったバラのゾーン）」に区分けし、エリアごとの特徴を楽しめるように植栽を行った。

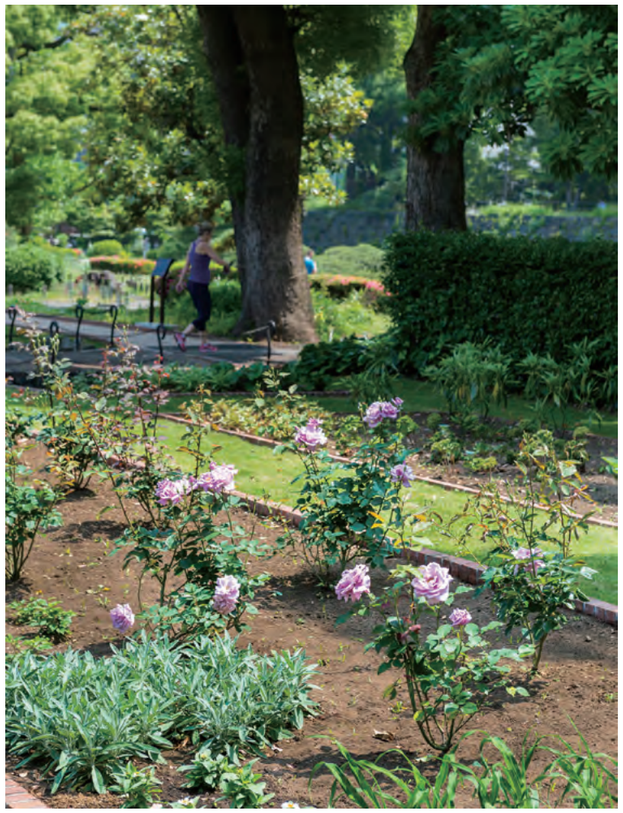
さらに「香りのゾーン」には、車椅子でもバラに近づき、香りを楽しめるようバリアフリーの細園路を新設。細園路入り口には、点字プレートも設置された。なお、今回植栽されたバラは71種250株。バラの総数は以前と変わらないが、品種は倍以上に増加した。

1903（明治36）年の開園以来百余年、人々の憩いの場となってきた日比谷公園。その中心的存在である第一花壇は、今回の整備を経てさらにこの先も、日本の美しい景観と、これを守り育む姿勢を象徴する場として、多くの人々に親しまれていくに違いない。

●今回の整備で新たに設置された細園路の周辺は「香りのゾーン」。甘い香りを漂わせるのは「サイレントラブ」

●木陰には「葉芸」を楽しむ「シェードガーデン」を設置

●第二次世界大戦後、日米親善を祈念して寄贈された「ヘレン・トローベル」。第一花壇がバラ園として整備されるきっかけになったといわれている。ただし、株は更新されている



●「ブルーゾーン」には青系のバラが集められている。足元の草花も青系に統一して雰囲気をつくっている

●第一花壇の維持管理は、東京都公園協会と公益社団法人園芸文化協会が合同で行っている

募集の対象

シンボル・ガーデン部門	全国を対象	地域のシンボル的な緑地として、緑のもつヒートアイランド緩和効果、生物多様性保全効果などを取り入れることにより、人と自然が共生する都市環境の形成及び地域コミュニティの活性化に寄与するアイデアを盛り込んだ緑地のプランを募集します。
ポケット・ガーデン部門	全国を対象	日常的な花や緑の活動を通して、地域コミュニティの活性化や保育園・幼稚園、学校、福祉施設などでの情操教育、身近な環境の改善に寄与するアイデアを盛り込んだ花や緑のプランを募集します。
特別企画 「おもてなしの庭」	東京都限定	2020年に向けた特別企画として、花と緑で観光客をお迎えする魅力ある緑の創出、及びその場所でのおもてなしの活動に関するアイデアを盛り込んだプランを東京都内限定で募集します。

表彰

シンボル・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞800万円以内（助成金）
	緑化大賞	2点以内	副賞800万円以内（助成金）
ポケット・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞100万円以内（助成金）
	コミュニティ大賞	9点以内	副賞100万円以内（助成金）
特別企画「おもてなしの庭」	大賞	1点程度	副賞2,020万円以内（助成金）

審査委員

委員長	進士五十八（福井県立大学学長／東京農業大学名誉教授）
委員	金子忠一（東京農業大学教授） 栗田卓也（国土交通省都市局長） 永山妙子（マネジメントコンサルタント） 藤沢久美（シンクタンク・ソフィアバンク代表） 松本肇（株式会社産業経済新聞社取締役営業・事業担当） 村上暁信（筑波大学システム情報系教授） 稲垣精二（第一生命保険株式会社代表取締役社長） 小野文夫（一般社団法人第一生命財団常務理事） 宮下和正（公益財団法人都市緑化機構専務理事）

※役職は2017年審査会当時

スケジュール

募集期間	2017年4月1日～6月30日
審査会	2017年9月25日
入選発表	2017年10月17日
表彰式	2017年12月4日 於:明治記念館

主催等

主催	公益財団法人都市緑化機構、一般財団法人第一生命財団
後援	国土交通省、環境省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、東京都（おもてなしの庭）
特別協賛	第一生命保険株式会社
協賛	一般社団法人建設広報協会、一般社団法人日本公園緑地協会、一般社団法人日本造園建設業協会、 都市緑化基金等連絡協議会
協力	株式会社フジテレビジョン、株式会社産業経済新聞社、株式会社ニッポン放送

city&life 別冊

2019年3月5日発行

発行者　一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力　株式会社 アルシーヴ社
斎藤夕子

撮影　坂本政十賜

デザイン・レイアウト　生沼伸子

印刷　株式会社 エイチケイグラフィックス

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city&life 別冊